きっと、魔法に会える

美術館（びじゅつかん）に行ったことはある？　静かに作品を見るだけでつまらない、という人も多いかも。でも最近は、子どもが楽しめる美術館がふえている。そこは何か新しい発見がある場所みたいだ。美術作品（アート）を通じて人と人の関係をつなげる名人のヒビノ隊長に〝心がまえ〟を聞き、未知の世界へ冒険（ぼうけん）に出てみよう！

ヒビノ隊長と アートで冒険!

「魔法の美術館」展で、光るボールを動かし、映像の変化を見つめる子どもたち

美術館はワクワクいっぱい

パンダで知られる上野動物園がある東京・上野公園。ここは有名な美術館や博物館が集まる場所でもある。その一つ、東京都美術館に子どもたちが楽しんでいる会があるという。たずねてみた。

×　×

その会は東京都美術館などが昨年九月から毎週行っている企画「放課後の美術館」。参加登録者は小学校低学年が多く、上は中学一年生まで約四十人。毎回二十人ほどが集まる。

早く着いた子どもたちは工作に取り組んでいた。つくえには色えんぴつやスケッチブック、はさみなどがあり、上野周辺のお店でもらった布切れやボタンなども工作の材料になっている。子どもたちのアート体験を手助けする「とびラー」とよばれる大人たちが、作品をのぞきこんだり、手をかしたりしている。

午後三時半を回ると、出発の時間。動物園や博物館、美術館。行き先ごとにグループをつくり、とびラーと出かけていく。

上野の森美術館の展覧会「魔法の美術館」へいっしょに行った。光や新しい技術を使った展覧会で、作品にさわることもできる。

手をかざすとシャラシャラという音とともに光が波のように広がる作品があった。

「魔法みたい！」。声がはずんだ。

光るボールを転がすと、きらめきながら映像が変化する作品はゲームのよう。「もう少し右だよ」。知らない子とも会話ができるようになった。

東京都美術館では、英国の画家・ターナーの展覧会で男の子たちが興奮気味だった。

「すっげえ！　最強でかい！」

「船、こわれそうだよ」。あらしの海での戦争をかいた大きな絵を前に、ひそひそ声もだんだん大きくなる。「3Dみたい」「本当に月が光っているよ」と、するどいコメントも出た。

女の子たちは専用のノートに気付いたことをびっしり書きこんでいた。とびラーは「あの旗はどこの国旗？」「何をかいた絵かな？」と聞き、みんなと小声で会話する。

「ターナー展」で熱心にメモを取る女の子たち

行き先からもどった後は「ふりかえり」の時間。iPad（アイパッド）で当日写した写真や資料を見ながら、感じたことを発表しあう。ほかの子の話も聞くと、自分で考えたことや気付いたこと以上の発見がある。

美術館の外では雨上がりの空に、にじが二つもかかっていた。とびラーが「何色が見える？」と聞くと「七色！」「十色！」。公園にみんなの声がひびく。「今日が誕生日だといいのにな」。だれかがそうつぶやいた。

主な美術館の子ども向けプログラム

北海道立近代美術館［札幌市中央区］	毎年夏と冬に子どもが楽しめるミュージアムスクールやワークショップを行う。ほかにも、展覧会に合わせたプログラムなどがある
青森県立美術館［青森市］	毎月1回、小学校低学年までの子が体を動かしたり、絵本を楽しんだりする「キッズルームおはなし会」を行う。美術館の部屋で自由に工作ができる日やワークショップもある
東京都美術館［東京都台東区］	東京芸大と協力し、上野の九つの文化施設（しせつ）で「ミュージアム・スタートあいうえの」プログラムを開始。「放課後の美術館」のほか、障害（しょうがい）のある子どもたちのためのワークショップも
世田谷美術館［東京都世田谷区］	夏休みを中心に行う「こども美術大学」のほか、中学生以下を対象としたワークショップ、児童・生徒向けの鑑賞（かんしょう）教室を行っている
ワタリウム美術館［東京都渋谷区］	1996年から子どもたちのためのワークショッププログラム「アート・一日小学校」を行っている
金沢21世紀美術館［金沢市］	自由に遊べるキッズスタジオがあるほか、ワークショップや小学4年生が対象のミュージアムクルーズ（鑑賞会）もある。美術館の庭にはいつも、体験して楽しめる作品がある
大原美術館［岡山県倉敷市］	子どもが参加して体験学習できる「チルドレンズ・アート・ミュージアム（チルミュ）」のほか、幼稚園・保育園の子ども向けプログラムなども
山口情報芸術センター（YCAM）［山口市］	小学4年生以上が対象のワークショップでコンピューターのプログラムや映像を作るのを体験できる
熊本市現代美術館［熊本市中央区］	絵本などの読み聞かせのプログラムや、0～6歳（さい）の子どもと家族を対象にした鑑賞ツアーなど

アートを楽しみ 創造性引き出す

アートは今、教育でも注目されている。理由をくわしい先生に聞いた。

×　×

どんな子も内側に創造性を持っている。その力をアートによって引き出し、育てることが、知能や心の発達にとって一番の基本になると考えられている。いわば「アートを通した創造性の教育」で、イタリアのレッジョ・エミリア市が有名だ。

アーティストの仕事は、日常の中にかくれている別の世界を発見することだが、それは実は子どもが日々おこなっている。だからアーティストと子どもは共感しやすい。

大人の話を聞いたり、作品を見たりするだけでなく、子どもたちが自分で活動できる環境づくりがもっと求められる。しかし今は美術館などに、そうした教育を担当する学芸員がとても少ない。

「どう教育するか」ではなく、大人が子どもといっしょに遊ぶこと。楽しむことで何より子どもの創造性がはぐくまれますよ。

美術家・日比野克彦さんに聞く アートのおもしろさって何??

日比野克彦（ひびのかつひこ）さん＝写真＝は、日本中の美術館や芸術祭で活躍（かつやく）する人気美術家。ヒビノ隊長、アートの本当のおもしろさは何ですか。

初めてお母さんの顔をかいた絵ってあるよね。それはすごく大切に家に取ってあったりする。だけど子どもにとって何がうれしいかって、お母さんが喜んでくれたこと。自分がしたことに対して、だれかが反応（はんのう）してくれる。それがあれば、人は生きていける。

ぼくの考えるアートは、大人も子どもも関係なく、人と人が気持ちを表し、おたがいの考えを確認（かくにん）したり、反応しあったりすることもふくめたもの。

いじめが問題になっているけれど、その原因（げんいん）の一つは、学校に入ると、ほかの人とちがう反応をすることにおくびょうになってしまうから。学校のクラスには、同じ年の人しかいないよね。本当はおじいちゃんや、ちがう言葉を話す外国人や、年上の高校生がいるような場所にいる方が、「自分らしさ」って見えやすいし、表しやすい。

学校の図工や美術の授業（じゅぎょう）では、技術は教えられる。けれど、「美」を通していろいろな考え方や反応に出合うという本当のアートのおもしろさまでは、伝えきれない。

学校でできないことを今、美術館がやっていこうとしている。今まで美術館は身近な場所ではなかったけれど、子どもが一人で毎日来られる所にしようとしている。学校とはちがう人たちが集まっていて、ちがう考え方に出合える場所だ。

そういう所は、実は美術館だけじゃない。都会からはなれた場所で、アーティストがうつり住んで作品を作ったり、芸術祭が開かれたりしている。そこに出かけてきた人が、船に乗ったり、おいしいご飯を食べたりする。絵や彫刻（ちょうこく）のような「モノ」を作るだけじゃなく、そうやって人が集まってくるような「コト」を起こすのもアートなんだ。

子どもの時に、そういうアートを経験（けいけん）して、10年後に大人になったら、今までとはまったくちがう発想を生み出すことができるはず。子どものため？　実は「将来（しょうらい）大人になって社会をつくる人」のための話なんだ。

最初は、知らない世界を冒険する気持ちかもしれない。でも、新しい友達をつくりにいくつもりで行ってみようか。

NEW OTANI WEDDING
ウエディングプレヴュー
Wedding Preview
2013.2.9 Sun. 10:00～19:00 入場無料
ホテルニューオータニでの婚礼のすべてをご紹介する、
半年に一度のウエディングイベントです。
ご家族の皆さまでお気軽にお越しください。
◎1月も各種ウエディングイベントを開催いたします。
1月11日(土)～13日(月・祝)……お年玉付きウエディング相談会
1月19日(日)……グランドウエディングフェア
1月26日(日)……ウエディング相談会
［ご予約・お問合せ］ブライダルコーディネーション
Tel.03-3234-7777(9:00～19:30) www.newotaniwedding.com
The New Otani
〒102-8578 東京都千代田区紀尾井町4-1 Tel.03-3265-1111